

# ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む

## (3) ブルデュー社会学におけるハビトゥス概念

安田 尚

今回は『実践感覚』の「第三章 構造、ハビトゥス、実践」を読んでみることにしよう。本章では第一

章と第二章の統一、つまり実践をめぐる客観主義と主観主義の止揚（批判と統合、展開）がテーマとなつている。それを可能にするのが「ハビトゥス概念」にほかならない。

さて、ブルデュー社会学において再定義され、その

特有な概念となつた「ハビトゥス」の由来について説明しておこう。周知のようにこのハビトゥス(habitus)という用語は、アリストテレス以来の概念であるが、ギリシア語ヘクシス(hexis)をスコラ

哲学の大成者トマス・アクイナスがラテン語ハビトウスに訳したものとされている。その後、「ヘーゲル、フッサール、ウェーバー、デュルケム、モース」といつた、実際に多様な著作家によつて、数限りなく用いられた」とブルデューは、指摘している（註1）。さらにブルデューはこの旧来から使われてきたハビトゥス概念を「全面的に考え方直した」と述べている（註2）。

ブルデュー自身の解説によれば、その一般的な意味は次のとおりである。ハビトゥス概念の歴史をつらぬく意味は、「習得された、恒常的で生成的な性向のシステム」である（二四九頁）。

ところで、本章ではハビトゥスについては、詳細に

論じられているが、「構造」については説明されていない。すこし補足しておこう。ブルデューの場合、構造とは「目に見えない客観的諸関係」である。行為者の意識や意図を超えた関係性である。行為者には見えないもの、つまり経験的には把握できないもの、意識

されることのない関係性が「構造」である。しかも「構造」は行為者に絶大な拘束力をもつていて（註3）。

まずブルデューは冒頭で、本章の戦略的課題を提示する。それは、客観的な関係を「個人と集団の歴史の外すでに構成された実在」とする「構造の実在論」、つまり構造の実体論である「客観主義」にも、かつまた「社会的世界のもつ必然性を全く説明しえない」「主観主義」にも陥ることなく、行為の理論を打ち立てることである。そのためには、ハビトゥス概念をつがかりに「実践」そのものに立ち戻らなければならぬ（八三頁）。

さて、実践とは何か。それは「歴史的実践の客観化された生産物と身体化された生産物との、[つまり]構造とハビトゥスとの弁証法の場〔交点〕である」（八三頁）。すなわち、実践とは構造とハビトゥスの弁証法的関係項、弁証法的遭遇の場である。行為者の

内部に身体化されたハビトゥスと、行為者から独立した客観的構造との遭遇が実践だというのである。

### ハビトゥスの概念規定

ついでハビトゥスの概念規定がおこなわれる。まずハビトゥスを生み出すのは、「生活条件の特定の集合と結び付いた様々な条件づけ」である（八三頁）。そして、「ハビトゥスとは、持続性をもち移調可能な性向のシステムであり、構造化する構造として、つまり実践と表象の生産と組織化の原理として機能する前以て傾向性を与えた、構造化された構造である」（八三頁）。

ひとまずハビトゥスは、性向のシステムとされ、その働きは実践と表象を生み出すということにある。この実践と表象は、計算合理性の所産でも、規則への従属の結果でもない。さらに、ハビトゥスを構成する性向（dispositions）は「持続性」をもちながらも「移調

可能」、つまり変形や修正が可能なものとされる。ここで言う「トランスクレザブル移調可能」とは、多様な実現形態をとりながらもその原理、構造を変えないという意味である。

さらに、ハビトゥスが実際にどのように機能するかが語られる。「ハビトゥスの反応は、まず計算を度外視して、客観的可能性との関係で規定〔決定〕される」（八四頁）。この客観的な可能性は、行為者の直面している現在の状況に書き込まれている。ハビトゥスは、この可能性を認識し、評価することによって、その状況に反応するのである。こうして行為者は、客観的可能性に主観的願望（「動機付け」と「欲求」）や目的を見つけだし反応する、つまり実践するのである。

そこには、客観的可能性と目的や主観的願望との相關関係が成立する。性向が持続的に教え込まれる結果、やれること（可能性のあること）しか望まない（主観的願望）が、習い性、つまりハビトゥスとなるのだ。だから「可能性の低い実践は、考えられないもの」

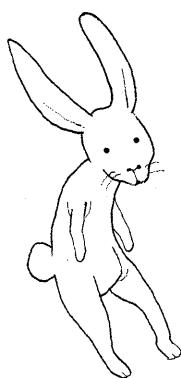
(八五頁)として、はじめから排除されることになる。

した「文化資本」の重要性を強調するのは、このためなのである。

## ハビトゥスを形成するのは、家庭

## ハビトゥスは、歴史の産物

さて、このハビトゥスはいったいどこで形成されるのであろうか。それは、生活条件の特定の集合である「階級」において、さらにそれが具体的に現象する「家族」においてである。経済的・社会的必然性という「外的必然性の固有な家族における現れ（両性の商業形態、物の在り様、消費の形態、親族との関係など）を通じて」ハビトゥスは形成される（八六頁）。このように「家族」において生みだされたハビトゥスは「それ以後はあらゆる経験の認識と評価の原理」（八六頁）となる。このように原初的なハビトゥス形成の場は、家族なのである。ブルデューが教育の原理論とも言うべき『再生産』や、『遺産相続者たち』において、家族における「一次的教育」や家族から相続



ところで、ハビトゥスは歴史の産物でもある。そして、このことが主観主義に対しても実践の「恒常性」や「規則性」（いつも同じことをする）を、客観主義に対してはハビトゥスの「無限の能力」や「相対的自立性」を対置する根拠となる。すなわち「歴史の産物であるハビトゥスは、個人的・集団的実践を、したがつて歴史を、歴史がもたらした図式に沿つて生産する」（八六頁）。すなわち、ハビトゥスは歴史の産物である。

あるとともに歴史を生産する。しかも、ハビトゥスは歴史の產物である「図式 (scheme)」にもとづいて実践を生みだすことで、歴史をつくるのである（ここでいう「図式」とは本連載一回目で述べた「身体化された分類図式」のことである。本誌七月号、二四〇二六頁を参照）。

「そうした過去の経験は、それぞれの身体に認識・思考・行為の図式の形態でたくわえられ〔沈殿し〕、どんな正式な規則よりも、どんな明示的な規範よりも確実に、時間の経過の中で、実践どうしの整合性と実践の恒常性を保とうとする傾向をもつてゐる」（八六頁、傍点＝安田）。

したがつてハビトゥスとは、進行しつつある現在の中に存続する過去であり、その原理（＝ハビトゥス）によつて構造化される実践の中に姿を現すことによつて、将来にわたつて生き長らえようとする過去である。

ハビトゥスはこのように持続する過去として、すなわちその恒常性、規則性によつて特徴づけられる。

同時にそれは限定付きの「無限の能力」＝自由でもある。ハビトゥスは、ハビトゥスの生産条件の限界内で、認識・思考・表現・行為を自由に生み出す無限の能力である。「ハビトゥスは、構造の產物であるが、その構造はハビトゥスを通して、機械的決定論のようにではなく、ハビトゥスの発明に最初から与えられた拘束と限界内で、実践を支配する」（八七頁）。すなわち、構造・ハビトゥス・実践の三者の間には、構造→ハビトゥス→実践の関係が成立する。構造はハビトゥスを媒介として、実践を生みだすのである。さらに後述するように、実践が構造（＝制度）を生みだすことによつて、この三者には円還的関係が成立する。

ハビトゥスは過去の產物であつた。しかし実践そのものは、過去の社会的条件からも現在の社会的条件からも説明できない。なぜなら、実践を説明しうるの

は、ハビトゥスが生産された社会的条件とハビトゥス

の行使される社会的条件を関連づける場合だけだからである。しかし、この「関連づけの捨象」を可能にするのが、『無意識』である。この『無意識』は、結局は歴史の忘却にほかならない」（八九貞）。つまり、ハビトゥスは、「身体化」され、「自然化」され（自然なこと、当たり前のこととされ）、「忘却された歴史」である。

したがつて、「ハビトゥスは、実践に直接の現在が課する外的決定に対する相対的自立性をあたえる」ことになる（八九貞、傍点Ⅱ安田）。すなわち、ハビトゥスは「身体化」され、「自然」となった過去の社会的条件であり、「忘却され」て「無意識」となつているので、実践には自立性があたえられるのである。

つまり、実践が外的強制の形態をとらず、むしろ自発性の形態をとつて現れることに注目しておきたい。「忘却された過去」であり、「身体化された過去」で

あるハビトゥスが、実践の自立性の根拠なのである。

この「相対的な自立性」こそが、人間の「自由」にほかない。つまり、「この自立性は、作用を受けながら作用を及ぼす過去の自立性であつて、この過去が蓄積された資本として機能しながら、歴史から出発して歴史を生産し、個々の行為者を世界の中で一つの世界にする変化の中で恒常性を保証するのである」（八九貞、傍点Ⅱ安田）。人間の自由の余地はここに残されている。

要するに、忘却された過去の產物であるハビトゥスは、現在の状況からの要請に前以て実践を調整することによって実践に自立性を与えるというのである。

### ハビトゥスと制度

さらに、ハビトゥスと制度との弁証法的関係が論じられる。ここでは、実践はハビトゥスと制度との弁証法であり、この弁証法が即興、発明、歴史の創造を生

み出すこと、また制度はハビトゥスによつてその意味

や機能を再生産されること、制度の存立基盤は行為者

のハビトゥスにあること、ハビトゥスと構造「制度」

の一一致が「常識」を生み出すことが語られる。

「行為のリアルな論理は、歴史の二つの客体化を、つまり身体における客体化と制度における客体化を、同じことだが、客体化された資本と身体化された資本と

いう資本の二状態を対立させる」（九〇頁、傍点Ⅱ安田）。

つまり、ハビトゥスと制度の対立—弁証法的な意味での一が行為のリアルな論理だというのである。この歴史の二つの客体化によつて、「必然性やそれがもつ急迫性との距離がうまれる」（九〇頁）。歴史の二つの客体化、資本の二状態、つまりハビトゥスと制度が対立することで実践の自由、創造性が生まれる。こ

うした「距離」の典型的な例が、「規則に適つた即興」

という「意図せざる発明」にみられる「表現する性向と表現手段（語形論、構文論、語彙的な道具、文学

ジャンルなど）との弁証法」

（九〇頁）である。

このことは「機知」、「洒

落」がどうして生まれるかを

説明する。それは、「ハビ

トゥスが自由に使いこなせる

表現方法に完璧に精通してい

るので、この表現方法が必然的に含んでいる可能性のうちで最も希少なものに到達できるからである。つまり、「機知」とはハビトゥスが蓄積した方法を状況に応じて駆使することを意味する。「機知」は全くのゼロから生まれるのではなく、蓄積された文化資本の活用、増殖にはかならない。「天才」や「才氣」といえども学習の成果なのだ。

ハビトゥスは実践をとおして制度を活性化し、再生産する。「：ハビトゥスは実践感覚をとおして、制度に客体化された意味〔サノス〕の方向を再活性化する」（九一



頁)。しかも何ほどの「修正」や「変形」を制度に

くわえながら、ハビトゥスは制度を再生産する。そして

ハビトゥスの「身体化のおかげで、王、銀行家、神父は人になった世襲君主制、金融資本、教会になる」。

いいかえるとこれは、制度が身体化されたハビトゥスによってその意味を再生産していることであり、制度の「人格化」である。マルクスが「資本家の『人格』は、資本の『人格化』である」というのは、この制度の「人格化」を意味している。つまりこれが、制度と実践の相互再生産であり、「社会化」にはかならない。

要するに、制度が存続しうるのは、「物」と「身体」

にハビトゥスが客体化＝身体化されているからなのである。ブルデュー社会学の場合、構造が行為主体にとって超越的な存在とはされてはいない点に注目したい。つまり、ハビトゥスが、実践を媒介として構造を支えているのである。こうして「構造の実在論」が乗

りこえられるわけである。

さらにまた、この制度とハビトゥスの一致によって「常識」<sup>サンスコモン</sup>や「コンセンサス」の成立が説明される。

「同一の歴史が、ハビトゥスと構造〔＝制度〕に客体化されているがゆえに、又その場合にだけ、ハビトゥスの生みだす実践は、相互に理解可能なものとなり、構造に直接調整され、相互に協奏したものとなつており、…客観的意味を…もつことになる」。こうして実践感覚と客観的意味の一一致によつて『常識』が形成されることになる」(九二頁)。

### ハビトゥスと階級、個性

次いで、ハビトゥスと「階級」との関連が問題とされる。生活条件の均質性から生ずる、「階級」や「集団」のハビトゥスの均質性が、客観的にそれらのハビトゥスを一致させる。その結果、同一の階級や集団の「実践は、どんな戦略的計算とも規範への意識的な準

拠によることなく、客観的に一致する。また、どんな直接的な相互行為がなくとも、ましてや目に見える協奏がなくともお互いに調整されうるものとなる」（九三頁）。すなわち、階級は「構造」つまり「目に見えない客観的諸関係」の所産である。同じ階級に属するものどうしの「相互行為は、：行為者の性向をうみだす。「そしてこの相互行為は」：行為者にその相対的な地位<sup>ポジション</sup>を割りあてる客観的な構造に負っている」（九三頁）。

さらに、階級のハビトゥスと個人のハビトゥスとの関連が問題にされる。個人のハビトゥスは「階級と軌道における位置の特殊性」から生ずる「構造的ヴァリアント」「変異」にほかならない（九六、九七頁）。この「軌道」における変異とは、同じ階級の中で「上昇」「下降」「現状維持」などの違の違いのことである。また、この個人のハビトゥスの違いは、共通の「スタイルからの偏差」にすぎない。

〔即目的〕社会階級〔日本語的な意味での「階級」とは、：共通な・ハビトゥスを備えた、生物的個体の不可分な一集合〕（九五頁）である。

すなわち、ハビトゥス生産の社会的条件の「同質性」、「相同性」「構造的類似性」によって階級的同質

性が確保されているが、同時に「地位」の違いによるこの「同質性」からの「偏差」による多様性があるのだ。

また、ハビトゥスはその一貫性を保持しようとする保守的傾向をもつてゐるがゆえに、ハビトゥスを危険にさらしかねない「情報」を避ける「回避戦略」を駆使する。その結果、階級のハビトゥスはその「同質性」を保持することになる。

#### 目的論の幻想、合理的行為論の批判

さらに、ブルデューは行為の目的論的解釈や相互行為論の問題点を、ハビトゥス概念によって批判する。実践は目的 $\Rightarrow$ きたるべき未来によつて規定されているが、本当はハビトゥス $\Rightarrow$ 過去によつて規定されている。ブルデューは、ポトラッヂ（註4）の例を引きながら「相互行為論」、特に行為の目的論的解釈を批判する。ハビトゥスを共有する二人の行為者が

想定され、「贈与」 $\rightarrow$ 「お返し」 $\rightarrow$ 「競り上げ」のやり取りが例としてあげられている。この場合、最後の「競り上げ」、つまり贈られた物よりいい物を贈る義務が生ずると、果たしてこの相互行為が何らかの目的の追求であつたのかが疑問になつてくる。こうしたボトラッヂの相互行為を「目的論的に叙述すること」が「ナイーヴ」「バカ正直、愚か、間抜け」などとであることがわかる。すなわち、予測される結果が目的であるなら、こんな「競り上げ」を目的にするのはバカげた話だからである。

つまり、目的は予測される未来によつて規定されているのではないのだ。それとは反対に、目的は過去 $\Rightarrow$ ハビトゥスによつて規定されている。このことが分からるのは、「場違いな振る舞い」や「時代遅れの行動」（ドン・キホーテ）をする場合である。目的が、未来を「合理的に計算」して立てられているなら、こんな勘違いは起こらないであろう。成功した過去の経験 $\Rightarrow$

ハビトウスが、そのまま現在に適用されたからこうした失態が演じられるのだ。

さらに、ウェーバーの「合理的行為論」が批判される。つまり、ウェーバーの合理的行為論は、行為者がすべての状況とすべての行為者の意図を知り尽くして

いる場合にだけ成立するのであって、それは学者の知がつくり出したものにすぎない。

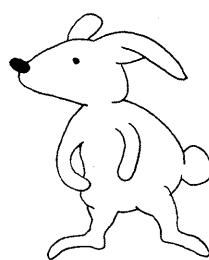
つまり、「客観的に妥当な」ものに従つて『賢明に』方向づけられた合理的行為というものは、「あらゆる状況と個々人の意図のすべてを行為者が認識していたら起ころう行為」ということになる——学者だけが、原因の完全な認識によって達成される行為が調整せざるをえない客観的チャンスを計算によって構築できる——とウェーバーが言うとき、合理的行為の純粹モデルというのは、実践の人間学的記述だとは考えられないことを明白に示している」(一〇一頁)。ウェーバーの合理的行為のモデルは、実際の行為＝実践を説

明しえないのである。ブルデューのハビトウス概念こそが、リアルな行為論を可能にする

というのである。

つまり、「実践は、計算上にしか存在しない抽象的な、非現実的な概念にすぎない利害の平均的チャンスなどに依存しているわけではなく、個々の行為者の階級が所有している固有のチャンスに依存している」のであり、そのチャンスをものにしうるか否かは「自己の資本に相関しているのである」(一〇二頁)。

最後に、あらゆることが可能というのは、主觀主義の行為論が語るおとぎ話であり、可能なことは「能力」との関係で規定されることが主張される。行為者にとっての未来的意味は、可能なものと不可能なものとの関係によって規定される。ハビトウスが「能力」



の問題であることがトマス・アクイナスを引きながら明らかにされる。主観主義や「社会学の行為論」が、抽象的、空想的に設定するような、いかなる「階級」にも「家族」にも属さない、いかなる具体的な「能力」にかかわらない行為主体が「客観的チャンス」に遭遇することで実践が成立するわけではない。主体の問題も自由の問題も、具体的な「能力」の問題として解明されねばならないのである。

(上越教育大学)

こと、直接的な相互作用に還元できない、目に見えない客観的な諸関係をとらえることです。お互いに会ったこともない人間どうしでも、ある構造のなかで結ばれていることがある、ということです。たとえば経営者と労働者は一度も会ったこともなくとも、客観的な関係に置かれています。彼等の行動を理解するには、その客観的構造を知らないければならないというようなことです」(傍点=安田)。(ピエール・ブルデュー『ピエール・ブルデュー—超領域の人間学』) 加藤晴久編、藤原書店、一九九〇年、三〇—三二頁)。

#### 註

- 1 ピエール・ブルデュー『構造と実践』石崎晴己訳、新評論、一九八八年、二四頁。
- 2 同上、二〇頁。
- 3 「私がやつたのは、社会を構造的に記述しようと試みたことです。つまり<sup>アシラクション</sup>相互作用でなく客観的な関係をとらえる